

---

# IS ゲッターを継ぐ者～失われた絆～

剣聖龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS ゲッターを継ぐ者〜失われた絆〜

### 【Nコード】

N2825Z

### 【作者名】

剣聖龍

### 【あらすじ】

ゴールとの決戦から1年：平和な学園生活を過ごす光牙達の前に突如、謎の生命体が襲来する。

だがそれは只の幕開けに過ぎなかった。

光牙は殺人犯の汚名を着せられ仲間達が敵として立ちはだかる！  
果たして光牙は、殺人犯の汚名を晴らすことが出来るのか！？

この作品は『IS インフィニット・ストラトス ゲッターを継ぐ者』の続編です。

なので、前作を読んでから読むことを強くお勧め致します。

## 第1話 放課後の来訪者、そして幕開け

〈ナレーションSIDE〉

ゴールとの決戦から1年が経った。

あの闘いは『第一次異種大戦』と呼ばれ、その闘いの功績により、世界はISと同じ位、ゲッター線について研究するようになっていた。

その闘いで闘った光牙達は現在、進級しIS学園の2年生となり、学園に居た。

光牙

「はあ、終わった終わった」

2年1組で授業が終わり、伸びをしているのは転生者でありゴールを倒した者の1人、滝沢光牙だ。

シャルロット

「光牙、今日はどうするの？」

そんな彼に話し掛けたのは光牙達と共に闘った者の1人、シャルロット・デュノアだ。

シャルロットの後ろには簪も居る。

2年に進級した時のクラス替えにより、光牙達はバラバラのクラスになったのだ。

現在のクラスは以下の通りである。

1組 光牙、シャルロット、簪

2組 セシリア、ラウラ

3組 篤

4組 鈴

光牙

「そうですね…いつも通り皆さんで特訓しましょうか」

シャルロット

「蘭も誘うの？」

光牙

「勿論ですよ」

ちなみに蘭とは今年入学して来た光牙の事を尊敬している1年の五反田蘭の事である。

そう言つて光牙達は教室を後にし、皆を誘いに行った。

くアリーナ

光牙達8人はISスーツに着替え、アリーナに集まっている。

蘭

「光牙さん、今日もよろしくお願いします!」

光牙

「じゃあ今日は実際に戦ってみましょうか」

蘭

「はい!」

そうやって蘭は訓練機、打鉄を纏う。

光牙

「じゃあ僕も…」

6人

『ちよつと待ったあ!!!』

光牙はゼクスファルコンを展開しようとしたが、箒達の声に光牙は驚く。

箒

「いつも光牙がやっているが、たまには私達が相手をしてやる!」

鈴

「ありがたく思いなさいよ蘭!」

蘭

「…ありがとうございます」

(せっかく光牙さんと距離を縮められるとおもったのに…)

光牙

「…どうなってるんだ?」

簪

「光牙って…鈍感」

光牙

「?????」

そんなこんなで、蘭とは箒が戦う事になり、模擬戦が始まった。試合は実力の差等もあり、箒の優勢で始まったが、蘭もそれなりに実力がある為、拮抗とした展開になっていた。

ラウラ

「蘭もなかなかやるな」

セシリア

「そうですね。箒さんとあそこまでやれるのですから」

戦いの様子を見ているセシリア達が各々感想を述べる。

光牙

「っ！？なんだ!？」

そんな中、光牙の脳裏に電流が流れたような感じがよぎった。

光牙

「これは…ゲッター線？だけどなにか違う…」

その瞬間、凄まじい轟音が響いた。

蘭

「え!？」

箒

「なんだ!？」

アリーナのシールドを突き破り、何かが落下して来た。落下した地点からは着地の衝撃で土煙が上がっており、その中から

現れたのは黒い体で体の至る所に黄色い目のようなものが付いており、二足歩行で立ち手足からは鋭い爪が生え、牙を生やし黄色い目が2つ付いた頭部を持つ“何か”が居た。

????

「キシヤアアアア！」

鈴

「何よあれ！？メカザウルス！？」

光牙

「違う、メカザウルスならゼクスファルコンが反応する筈！でも反応しないという事は、あれは全く違う何かだ！」

シャルロット

「どうするの！？光牙！」

光牙

「とにかく2人に加勢します！このままでは危険ですから！」

シャルロット

「じゃあ僕も！」

簪

「私も！」

セシリア

「私もですわ！」

鈴

「私もよ！」

ラウラ

「私もだ！」

シャルロットを始め、全員が加勢に行くことに同意する。

光牙

「じゃあ行きましょう！チエエンジ！ゼクスファルコンツ！」

光牙はガントレットを構え叫ぶ。

それに続くようにシャルロット達もそれぞれの愛機を展開し、光牙と同じように叫んだ。

セシリア

「ゲッターチェンジ！真ゲッター2！！！」

鈴

「ゲッターチェンジ！ドラゴン！！！」

シャルロット

「ゲッターチェンジ！ライガー！！！」

ラウラ

「ゲッターチェンジ！ポセイドン！！！」

簪

「ゲッターチェンジ！アトラス！！！」

そう言うと5人の愛機は緑色の光に包まれ、ゲッターマルチフォー

ムによって進化した姿になる。

(ゲッターのデータがコアに保存された為、パイロットの任意のタ  
イミングで使用出来る。)

それを確認した光牙はファルコンソード・ZXを展開してアリーナ  
のシールドを切り裂き、侵入した。

それに続くようにシャルロット達も侵入していく。

蘭

「光牙さん！あれは一体何なんですか！？」

光牙

「分かりません！只、あいつからは不気味な感じがするんです！」

そう言うと侵入者は光牙に飛び掛かってきた。

それを光牙はファルコンソード・ZXで受け、弾き飛ばす。

鈴

「貰いつ！」

そこへ鈴はダブルトマホークを構えて接近し、切り裂いた。  
侵入者はバラバラになって肉片がアリーナに散る。

鈴

「え？弱っ！」

シャルロット

「随分呆気ない敵だね」

篤

「まあ、倒したのなら良いのではないか？」

セシリア

「そうですね」

そう言っただけはアリーナを後にしようとした。

だが、その肉片がまだ蠢いていた事を光牙が気付いた。

光牙

「まだだ！まだやられてない！」

7人

『え！？』

バラバラになった肉片はまるで意思を持ったように一ヶ所に集まり、絡み合い、再び形を形成した。

簪

「再生した！？」

????

「キシヤアアアア！！」

侵入者が叫ぶと両腕が多数の触手に紐解かれ、それが絡み合い鎌のような形になった。

その鎌で侵入者は光牙達に斬り掛かる。

光牙達はバラバラになってかわすが、鎌がラウラにかすり装甲を切り裂いた。

ラウラ

「くっ！」

鈴

「ラウラ！くっ、このお！」

鈴が両肩からゲッターキャノンを放つ。

ゲッターエネルギーの砲弾が侵入者に命中し、右腕を吹き飛ばした。だが、次の瞬間吹き飛ばされた部分から触手が生え、先程の鎌より巨大に、鋭利になった鎌を形成した。

鈴

「う、嘘！？」

????

「ギシャアアアアアア！！！」

その鎌を鈴に目掛けて侵入者は振るう。

だが、その鎌が命中する直前に光牙が間に割り込み、ファルコンソード・ZXで防いだ。

鈴

「光牙！」

光牙

「はああああ！」

そのまま出力をあげて鎌を弾き、光牙は侵入者に接近する。

そのままファルコンソードで一閃し、左腕を切り落とした。

その状態で左腕だけマシンガンを展開し、銃口を侵入者の頭部に突き付けて発砲した。

零距离射撃で撃ち込まれた事により、頭部は原形を留めない程の状





本音

「なんだろ、これ」

カプセルをつんつんと本音はつつく。

その時、本音の後ろから忍び寄る影があり、その手には鉄パイプを持ち、本音の直ぐ後ろで振り上げる。

本音

「ほえ？」

本音が振り向いた瞬間、鉄パイプが振り下ろされ、ガンツ！という音が響く。

本音は頭から血を流して倒れ込んだ。

殴ったのは白衣を着た褐色の肌の大男だった。

男は鉄パイプを捨て、カプセルを持つとそれを落としてカプセルを割った。

それにより、中の肉片は生き物のように動き出し、何処かへ行ってしまうた。

????

「ステインガー君、此方は完了したよ。そっちはどうだい？」

男は通信機を取り出し、仲間と見られる人物に連絡を取る。

ステインガー

『此方も大丈夫だよ。カメラの映像は編集しておいた』

それを聞いた男は通信を切る。

そしてスイッチの付いた装置を取り出し、そのスイッチを押すと目の前の空間が裂け、そこへ入る。

すると裂けた部分は元通りになった。

（翌日）

次の日、いつも通り光牙は制服に着替え、朝食を取る為に食堂に来た。

その瞬間、光牙に視線が集中したが、光牙はいつも通りだと思い、特に気にしなかった。

すると光牙は前方に箒が居る事に気付いた。

光牙

「箒さん、おはようございます」

挨拶をする光牙。

だが、箒から返ってきた言葉はいつもとは違った。

箒

「…お前、誰だ？」

光牙

「…へ？」

思わず光牙は耳を疑う。

光牙

「何冗談言ってるんですか？僕ですよ、僕」

箒

「いや、本当にお前誰なんだ？」

光牙

「いや、だから…」

その時、急に食堂が騒がしくなり、光牙は何事かと思ってその方向を見る。

そこには食堂のモニターがあり、ニュースが流れていた。

キャスター

『昨日、IS学園に通う1年生の布仏本音さん15歳が殺害された事件ですが、犯人は同じく15歳の滝沢光牙だという事が学園の監視カメラの映像から判明し、現在緊急指名手配中です』

光牙

「な!!!???」

余りにも衝撃的な内容に光牙は驚愕する。

篤

「お前…!!」

振り向くと、篤達全員の視線が光牙に向いていた。

光牙

「くっ!!」

思わず光牙は逃げ出した。だがこれは、光牙を揺るがす大事件の幕開けに過ぎなかった…

**第1話 放課後の来訪者、そして幕開け（後書き）**

感想等、お待ちしております。

第2話 失われた絆！昨日の友は今日の敵！？前編（前書き）

少し短めです。

## 第2話 失われた絆！昨日の友は今日の敵！？前編

（ナレーションSIDE）

光牙は走っている。

この訳の分からない状況の中を。  
ただ走っていた。

光牙

「一体どうなってるんだ！なんで僕がのほほんさんを殺した事にな  
ってるんだ！？」

そう言っつて曲がり角を曲がると、女子達に出くわしてしまった。

女子A

「ね、ねえあれっつて…」

女子B

「テレビで言っつてた…」

女子C

「殺人犯…だよね…」

光牙

「いや、僕は…」

光牙が弁解しようと近付いた途端、女子達は蜘蛛の子を散らすよ  
うに逃げてしまった。

光牙

「中は駄目だ！ここは外へ！」

そう言っつて光牙は走り出した。

玄関から光牙は外に飛び出す。だが、そんな彼にビームが降り注いだ。  
だ。

光牙はビームが降り注いだ方向を見ると、ブルー・ティアーズを展開し、ライフルとビットを光牙に向けたセシリアが居た。

セシリア

「見つけましたわよ！貴方のような罪人はこのセシリア・オルコックとブルー・ティアーズが裁いてあげますわ！」

光牙

「ちよっ！何言っつてるんですか、セシリアさん！？」

セシリア

「な！貴方！何故私の名前を知っていますの！？」

光牙

「だから！僕ですよ、僕！」

セシリア

「貴方のような罪人等私の記憶にございませんわ！」

光牙

「はあ！？」

話が噛み合わない光牙に再びビームが降り注ぎ、咄嗟にそれをかわした光牙は再び走り出した。

光牙

「はあ…はあ…なんで篤さんとセシリアさんは僕の事が分からないんだ？」

なんとかセシリアを振り切った光牙は物陰に隠れ、息を整えていた。光牙は状況を確かめる為に物陰から少しだけ顔を覗かせると、打鉄式を纏った簪が居た為、顔を引っ込めた。

そしてその場から離れようとするが、目の前に現れた水色の装甲のISに遮られた。

光牙

「おおあ！た、楯無さん！？」

それはミスティアス・レイディを纏った楯無だった。それに驚いた光牙は尻餅を付く。

直ぐ様立ち上がる光牙だったが、声を聞き付けた簪によって後ろを塞がれてしまった。

簪

「貴方が本音を…許さない！」

楯無

「犯罪者には大人しく捕まって貰うわよ！」

光牙

「2人とも待つて下さい！僕が分からないんですか！？よく見て下さい！」

そう言つて光牙は楯無に近付く。

楯無は光牙をまじまじと見つめた。

楯無

「…滝沢光牙よね」

光牙

「思い出してくれたんですか！」

簪

「犯罪者だから捕まえる」

その言葉に思わず光牙はずっこけた。

光牙

「だから！なんでそうなるでー」

????

「見つけたぞ！」

必死に光牙は弁解しようとするが、突如上空から飛来したISがそれをかき消した。

その正体は紅椿を展開した簞だった。

簞

「滝沢光牙！貴様のような悪党はこの私が成敗してくれる！！！」

そうやって箒は両手の刀で光牙に斬り掛かった。

光牙

「箒さん！一体どうしたんですか！？本当に僕がわからないんですか！？」

箒

「問答無用！悪党の戯れ言等、聞く耳持たぬわ！！」

そうやって斬撃の激しさが増す。

光牙

「くそ！この頑固者が！いい加減にしろ！！」

光牙はゼクスファルコンの両腕を部分展開し、ゲッターブレードで刀を受け止めた。

箒

「部分展開だと！？」

光牙

「今だ！マツハ・ビジョン！！」

そのまま刀を弾き、両腕を収納してゲッターフェンリルのマツハ・ビジョンを使用し、一気に箒達を抜き去っていった。

（ナレーションSIDEOUT）

（蘭SIDE、学生寮、蘭自室）

私は今、一般生徒は自室で待機となった為、自室にいる。

蘭

「…どうして？」

私はぽつりと呟く。

何故なら、自分を除いた生徒や先生が光牙さんの事を知らないからだ。

でも私はしっかりと光牙さんの事を覚えている。

私は窓に歩み寄り外を眺めた。

外では先生達が訓練機を纏い、更に専用機持ちが飛び交っていた。

蘭

「光牙さん…」

私は光牙さんの名前を呟いた。

光牙さんはいつも私の訓練に付き合ってくれた。

いつも優しく接してくれた。

そんな光牙さんの事を、私は好きになっていた。

その好きな人が危機に晒されている。

それを黙って見てるなんて…出来ない！

私はそう心の中で呟くと部屋から飛び出した。

〔蘭SIDEOUT〕

〔ナレーションSIDE〕

その頃、光牙は又もや走っていた。

第達から逃れた後、隠れながら移動していたが、途中でシャルロットに見つかってしまい、今はシャルロットから追い掛けられていた。

アサルトライフルから放たれる銃撃から逃げ回っている内に、光牙は第6アリーナに辿り着いた。

光牙

「し、しまった！アリーナに誘導されてたのか！？」

シャルロット

「もう逃がさないよ！」

後ろを振り向くと、地表に降り立ったシャルロットが居た。

光牙

「止めて下さい、シャルさん！どうしたんですか！？」

シャルロット

「どうもこうも、僕は君という殺人犯を捕まえようとしているだけだよ」

光牙

「違う！僕は殺人犯じゃない！僕は無実だ！！」

シャルロット

「証拠もあがってるのに自分が無実だなんてよく言えるね」

シャルロットはまるで光牙が知っているシャルロットとは別人のように冷酷に言い放つ。

光牙

「本当に僕が分からないんですか？よく放課後に訓練したり、一緒に食事したり、一緒にデパートに買い物に行ったりしたじゃないで

すか!？」

その言葉に、シャルロットは驚愕した。

シャルロット

「ど、どうして君がそんな事を知ってるの!? 確かに僕はデパートに行ったりしたけど、一緒に居たのはゼクスファルコンだよ? なんで君が知ってるの?」

光牙

「だ・か・ら! そのゼクスファルコンが僕だからに決まってるじゃないですか!!」

シャルロット

「…よくそんな嘘が付けるね」

光牙

「は?」

シャルロットの言葉に光牙は拍子抜けする。

シャルロット

「確かにゼクスファルコンの正体は誰も知らない。だからって自分がゼクスファルコンだなんてよく言えたものだね」

光牙

「いやだから、本当に僕が…」

シャルロット

「動かないで!」

シャルロットはアサルトライフルを光牙に向ける。

シャルロット

「それ以上訳の分からない事言ってるよと容赦しないよ！」

その言葉に光牙はキレた。

光牙

「訳の分からない事言ってるのはどっちだよ……!!」

シャルロット

「っ!？」

光牙の怒声にシャルロットは驚いた。

光牙

「……シャルさん、僕がブレスレットあげた事も忘れたんですか？」

シャルロット

「……!」

光牙

「1年の時、臨海学校の前に一緒に買い物行って、その時にブレスレットあげたじゃないですか!それも忘れたって言うんですか!？」

その言葉にシャルロットは黙って聞いていた。

そして、光牙に向けていたアサルトライフルを下げた。

光牙

「思い出してくれたんですね！」

そう言つて光牙が駆け寄ろうとした瞬間、光牙の前を緑色のビームがよぎり、地面を爆発させた。

光牙

「うわああっ！」

その爆風で光牙は吹き飛ばされた。

そんな彼が体を起こし、前を見ると、彼は目を見開いた。

光牙

「…ゼクス…ファルコン…？」

何故なら、彼の前に真っ黒のゼクスファルコンが佇んでいたのだから。

### 第3話 失われた絆！昨日の友は今日の敵！？後編

〔ナレーションSIDE〕

突如として、目の前に現れた黒いゼクスファルコンに光牙は驚いていた。

ラウラ

「よく正確に狙ったな」

千冬

「流石は私の弟だ」

そこへシュバルツエア・レーゲンを展開したラウラ、暮桜を展開した千冬が黒いゼクスファルコンの付近に降り立つ。更に、上空には多数の教員が待機していた。

光牙

「…ラウラさん達、誰に話しかけてるんですか？」

ラウラ

「なんだ貴様。ゼクスファルコンも知らないのか？」

千冬

「私の自慢の弟であり、第一次異種大戦でゴールを倒した英雄だぞ？」

光牙

「……………」

光牙は2人の言葉に開いた口が塞がらなかった。

シャルロット

「やっぱりね。君がゼクスファルコンだなんて嘘じゃないか」

シャルロットが光牙に冷たく言い放った。

光牙

「…どうしてなんだよ…」

4人

『?』

光牙

「僕達…今まで一緒に闘ってきた、仲間じゃないですか!!」

光牙がシャルロット達を見上げながら叫ぶ。

だが、依然として3人は光牙を白い目で見ている。

光牙

「どうして…分かってくれないんだ…」

ラウラ

「何を言っているんだこいつは?」

シャルロット

「さあ?」

千冬

「おい、早く連れていけ」

千冬の指示を受けた黒いゼクスファルコンが光牙に歩み寄る。  
歩み寄ったゼクスファルコンはその手を光牙に伸ばした。

???

「待って!！」

その手が光牙に触れようとした時、アリーナに声が響き渡った。  
千冬達はその方向を向くと、その先には蘭がいた。  
蘭はそのまま光牙に駆け寄り、ゼクスファルコンと光牙の間に割って入る。

千冬

「…五反田、なんのつもりだ？」

蘭

「織斑先生!こんな事は止めて下さい!」

シャルロット

「何を言ってるの?彼は殺人者なんだよ?蘭はそんな彼を庇つの?」

蘭

「光牙さんはそんな事をするような人じゃありません!」

光牙

「蘭さん…」

光牙は蘭を見上げる。

蘭

「それは皆さんが一番分かっている筈じゃないですか!？」

千冬

「…五反田、そこをどけ。そいつを庇うのなら私達も容赦はしない」

そう言つて千冬達は武器を構え、蘭達を睨み付ける。

蘭

「嫌です！どきません！！」

そう言つて蘭はその場から動こうとしない。

千冬

「…仕方がない……やれ」

千冬がそう言つと、ゼクスファルコンが右腕を振り抜き、蘭を払い除けた。

蘭

「きゃあっ！？」

光牙

「蘭さん！」

吹っ飛び、倒れ込む蘭に光牙は駆け寄つた。

光牙

「お前…！」

光牙は蘭を払い除けたゼクスファルコンを睨み付け、右腕のガントレットを構えた。

だがその瞬間、空の一点が光り、千冬達と光牙達の間になんかが落下して凄まじい土煙があがった。  
その土煙の中から現れたのは、地面に突き刺さった巨大なニンジン。そのニンジンが縦に開き、中から現れたのは勿論――

束

「やあやあどうも！天才の束さんだよー！」

篠ノ之束だ。

千冬

「束！？」

光牙

「束さん！？」

突然現れた束に光牙達は驚く。

千冬

「どういつつもりだ束！」

束

「ちーちゃんごめんねー悪いけど今私はこーくんの味方だからー」

千冬

「なんだと！？」

束がそう言うと、ニンジンからアームのようなものが伸びてきて光牙と蘭を掴み、ニンジンの中に放り込んだ。

束

「それじゃバイバイ」

束もニンジンに入ると縦に割れていたニンジンが合わさり、そのまま飛んでいく。

千冬

「待て！」

だが、千冬言葉もむなしく、ニンジンはそのまま学園から飛び去ってしまった。

〔束の研究所〕

束の研究所についた2人は束に連れられ、研究室のような所に来ていた。

光牙

「束さん、どうして助けてくれたんですか？」

束

「いや、実は学園に謎の生物が現れたのを私は見てたんだ。それでその生物を調べようと思って、生物の破片が保管されてる学園の地下室に忍び込んだらあの子が居たんだ」

光牙

「あの子？」

光牙と蘭が首を傾げると、光牙の後ろから何かが抱き付いた。

???

「こーくん」

光牙

「この声…のほほんさん!？」

光牙が振り向くと、抱き付いていたのは頭に包帯を巻いた布仏本音ことこのほほんさんだった。

束

「破片が保管されてる場所に行ったらね、何故か破片は無くて代わりにのんちゃんが倒れてたんだ。まあ流石の私も怪我人を放っておく程じゃ無いからね。研究所に連れて治療したんだよ」

本音

「そう言う事」

光牙

「そうだったんですか…」

蘭

「あの！篠ノ之博士!」

束

「…誰?」

蘭

「私は五反田蘭と言います!それより、どうして先生達は光牙さんの事を忘れてしまったんですか!？」

束

「……こーくんどうする？教えても良い？」

光牙

「お願いします」

光牙が承諾すると、束はキーボードを操作し、モニターにデータを表示させていった。

束

「原因はこーくんが倒したあの生物だね。こーくんの攻撃で小さく拡散したあの生物がちーちゃん達の脳に入り込んで記憶を操作したんだと思うよ」

光牙

「記憶を操作……でもじゃあなんで僕は殺人犯になっているんですか？」

束

「実は学園のカメラの映像は合成されていたんだ」

そう言つて束が表示させたデータには、光牙ではなく、大柄の男が本音を鉄パイプで殴り付け、懐から装置のようなものを取りだして消える映像が流れていた。

束

「恐らく、これは映像の男がこーくんを陥れる為にやったんだと思う。そうじゃなきゃここまで手の込んだ事はしないよ」

本音

「あれれ？でもなんでらんらんはこーくんの事覚えてるんだろ？」

3人

『あ』

そう言つて3人は蘭を見る。

束

「これは…研究しないとイケないねえ」

束が両手をワキワキと動かしながら蘭に迫る。

蘭

「ひいつ!？」

ただならぬ気配を感じた蘭はその場へたりこんだ。

光牙

「あんたは何をやるうとしてんだよおおお！」

咄嗟に光牙は2人の間に入る。

光牙

「束さん！ゲッター線やゲッターロボの事とか教えますから変な事しないで下さい！」

束

「おお！それは興味深いね！じゃあ早速教えて貰うよー!!」

こうして、光牙は束にゲッター線やゲッターロボ、更にゲッターヒューマンの事を話した。  
それにより、束が調べた結果、蘭はゲッターヒューマンだということが分かった。つまり、蘭が記憶を操作されなかったのはゲッターヒューマンだからである。  
それにより、蘭と束も仲が良くなり、光牙が蘭の為に作ろうと思っていたゲッターロボを作ってくれる事になったのだった。

〈研究所、一室〉

束が用意した部屋の中で、光牙は閉じこもっていた。原因は勿論幕達である。

いくら記憶を操作されているとはいえ、親しい人に裏切られ、しかもそれが自分の事を受け入れてくれた者達と来れば、そのショックは計り知れなかった。

光牙

「……………」

ベッドの上に横たわり、動こうとしない光牙。

そこへ扉が開く音が響き渡る。

部屋に入室したのは蘭だった。

蘭

「光牙さん……大丈夫ですよ！皆さんは記憶を操作されているだけで……………」

光牙

「でも裏切られました。あれも嘘だったのかな。僕も受け入れてく

れた事も…」

光牙はそう言つて更にふさぎこむ。

そんな彼を見た蘭は耐えきれなくなり、光牙に抱き付いた。

光牙

「…え？」

蘭

「光牙さん、そんな事言わないで。私がついてます」

光牙

「蘭さん…」

そう言つて光牙は蘭の方を向く。

光牙

「あの、どうしてそこまで僕の事を…？」

蘭

「そんなの、私が光牙さんの事を好きだからです」

光牙

「え…」

その言葉に、光牙は顔を赤らめる。

蘭

「皆さんだつて光牙さんの事を好きなんです。だから皆さんの事を信じてあげて下さい。きっと大丈夫ですよ」

光牙

「蘭さん…ありがとう」

そう言つて2人は暫く抱き合い、一晚を共に過ごしたのだった。

（次の日）

目を覚ました光牙は体を起こし、着替えると右腕のゼクスファルコンに意識を集中させた。

すると次の瞬間、光牙の意識は辺り一面が真っ黒な空間に飛んだ。

???

『また会つたな…』

そんな光牙に声が響く。

それは緑色の光から発せられていた。

???

『汝…今度はどのような可能性を望むと言つのだ？』

光牙

「分かつたんだよ。“誰かを守る”って事の本当の意味が」

???

『ほう…ならばその意味とやらを聞かせて貰おうか』

光牙

「…誰かを守るっていつのは神にも悪魔にもならず闘つ事も言つか

もしれない。でもそれは少し違う。本当の守るっていうのは、神にも悪魔にもならないんじゃないかと、自分が守りたいと思ったものを守る為に例え神や悪魔、いや、それすら越えた存在にもなる覚悟があるかどうかって事なんだと思う」

????

「…それが答えか？」

光牙

「ああ。だから僕は、箒さん達を守ると誓った。その為に僕は例え神や悪魔と言われようが闘う！それが答えだ！！」

光牙は緑色の光に対し、言い切った。

????

『よかろう！では叫べ！汝が誓った想いを胸に！それが汝の新たな可能性を開く！！』

光牙

「おっしゃあ！」

光牙は自分の想いを胸に、高々とゼクスファルコンを掲げた。

光牙

「真！ファイナルゲッターアアアアアア！！チエエエエエエンジッ  
！！！！」

光牙の叫ぶと、ゼクスファルコンに光が集まって閃光を放ち、辺りを閃光が包んだ。

〈研究所、一室〉

光牙は目を開けると、意識は既に体に戻っていた。

その右腕には、真の可能性に覚醒し、真の最終進化、真ファイナルシフトを終え、進化したゲッター線、『真ゲッター線』の力を手に入れた新たな愛機、赤、白、黄、青、更に黒のラインが刻まれたガントレット、『真ゲッターロボ』がそこにあった。

〈研究室〉

朝食を済ませた2人は束に呼ばれ、研究室に向かった。研究室には束の他に、本音も居た。

束

「2人ともおはよう！早速だけど、蘭ちゃんにはこれを渡すね！」

そう言って束が取り出したのは緑と白とピンクの腕輪、光牙が設計した蘭のゲッター、『ゲッターフェアリー』だ。

光牙

「完成したんですね、ゲッターフェアリーが」

蘭

「ゲッター…フェアリー…」

束

「蘭ちゃんのゲッターだよ！これで蘭ちゃんも闘えるね！」

蘭

「ありがとうございます！」

蘭は束達に頭を下げ、礼を言う。

束

「さてさて、そろそろ作戦に入ろっか！」

3人

『はい！（りょうか〜い）』

（数時間後、IS学園、ピット）

学園のピットでは千冬と真耶がモニターの内容を凝視していた。そのモニターにはこう映し出されていた。

果たし状

本日の午後1時、第6アリーナにて決闘を申し込む。尚、決闘の相手には以下の者を指名し、マスコミを使ってその様子を流すこと。

決闘指名者

篠ノ之箒

セシリア・オルコット

凰鈴音

シャルロット・デュノア

ラウラ・ボーデヴィツヒ

更識楯無

更識簪

織斑千冬

山田真耶

以上、9名を指名する。

滝沢光牙

千冬

「果たし状…か。全く、ふざけた真似をしてくれる」

真耶

「どうしますか？」

千冬

「とりあえず従ってやれ。全ては奴が来てからだ」

真耶

「分かりました」

千冬

（滝沢光牙……一体あいつは何がしたいんだ？）

（午後1時、第6アリーナ）

アリーナには千冬を始め、指名された9人がISを展開し、佇んでいた。

そして、午後1時になると同時に、第6アリーナに光牙が現れた。  
それにより、千冬達は構える。

光牙

「皆…今に思い出させてやるからな…！」

そう言つて9人と対峙する光牙。

光牙

「チエエエンジツ！！真ファルコンツ！！」

光牙が叫ぶと、光が光牙を包み込み、その光が晴れると、ゼクスファルコンによく似た新たなゲッター、『真ゲッターファルコン』が姿を現した。

そして、背中から真紅の翼を展開した光牙は9人に向かっていった。

**第3話 失われた絆！昨日の友は今日の敵！？後編（後書き）**

感想等、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2825z/>

---

ISゲッターを継ぐ者～失われた絆～

2011年12月20日00時50分発行